

角川武蔵野ミュージアム

角川武蔵野ミュージアム
埼玉県所沢市東所沢和田 3-31-3



今回ご紹介いたしますのは、角川武蔵野ミュージアムです。JR 武蔵野線東所沢駅より徒歩10分、ところざわサクラタウンの中にあります。ところざわサクラタウンは、KADOKAWA による日本最大級のポップカルチャー発信拠点。ミュージアム、イベント、レストラン、書店、オフィス、神社といった、あらゆる文化をひとつにしたクールジャパンの拠点として 2020 年に誕生し、その中でも「角川武蔵野ミュージアム」は、図書館、美術館、博物館が融合した新しいコンセプトの文化複合施設と位置付けられています。今回は特に、その図書館の機能を中心にお伝えしたいと思います。TOKOROZAWA SAKURATOWN の文字看板を横目に階段を上ると、今回取材させていただく「角川武蔵野ミュージアム」が出迎えてくれます。広大な敷地にランドマークとして佇む、隈研吾さんがデザイン監修を手掛けた「角川武蔵野ミュージアム」は約 2 万枚もの花崗岩の石板が全体を覆っている圧巻な佇まいで、建物の横にはプールのように水盤が広がり、夏には水遊びをする子供たちの賑やかな声が響き渡ります。



▲エディットタウンブックストリート

エレベーターで4階に上がると、本が商店街のように賑やかに並んでいる空間、エディットタウンブックストリートが出迎えてくれます。

エディットタウンブックストリートは棚の高さが違えば、本の並び方も異なる、既存の図書館にはない図書空間となっています。空間の色のトーンは暗めで落ち着いており、所々に椅子が配置してあり、気になる本を手にとってすぐに読むことができる環境が整っています。

一般的な図書館とは違い、約25,000冊の本が松岡正剛館長監修による独自の分類法によって分類されています。一見、無造作に配置されているようにも思えますが、実は棚ごとに並べる順序が決まっており、こちらにいらっしゃる司書の皆さんは常に棚の整理に追われているそうです。棚ごとの写真、リストを常に持ち歩き、来館者の皆様からのお問い合わせにも対応されているとのことでした。宝探しのように本を見つける楽しさのようなワクワク感でいっぱいの空間が広がっており、ある場所でぐるりと見渡すと本自体が暴れたがっているような、見つけてほしいと叫んでいるような本の世界に引きずり込まれるような錯覚すら覚えます。書架にはPOPも設置されているのですが、わざと見つけにくい場所に配置されていたり、気が付くと自らすすんで宝探しに参加している気分になりました。



ブックストリートには、本だけでなく、モニターやポスター、ブックウェアなどの展示もあり、本が一部でありながら、本だけではない、どこを見てもワクワクするような面白い空間が広がっていました。



▲展示されているブックウェアやポスター

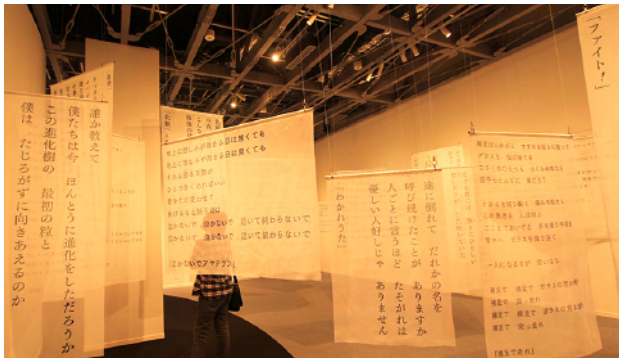




▲本棚劇場

4階を奥まで進むとメディアで目にする機会も多い本棚劇場へとたどり着きます。高さ約8メートルの巨大な本棚と見渡す壁一面に、本が見上げるほど並べられているのはここでしか見られない圧巻な眺め。また、本と本同士の目立つような並びや表示の仕方一つによって、見るたびに、来館するたびに増えてくるものが違ってくるような、そして棚と自分、棚と棚を連想でつなげていけるような本棚と本の並び順が、建物全体に広がっていました。プロジェクションマッピングも上映されており、定期的にプログラムも変更されているそうです。

5階にあがると、武蔵野ギャラリーという期間によって展示内容を変えているスペースがあり、取材をした日はアーティストとして活躍されている中島みゆきさんの展覧会が開催されていました（2024年6月23日で終了しています）。中島みゆきさんの活動や経歴、言葉の数々が展示されており、楽曲をレコードにて実際に聴けるコーナーもありました。ただ展示されたものを鑑賞するだけでなく、お客様のリクエスト曲が展示会場全体のBGMにもなる空間には多くのお客様が順番待ちをされており、リクエストした中島みゆきさんの曲をまだかまだかと待ちながら、皆さん懐かしの曲を堪能されていました。



▲武蔵野ギャラリー：中島みゆき展「時代」2024
めぐるめぐるよ時代は巡る



▲CHAPTER2 MY FAVORITE SONG

角川武蔵野ミュージアムの入口となる2階のロビーは、多くのお客様をお迎えできるような広々とした空間となっていました。また外へ出たすぐの所には角川武蔵野ミュージアムの象徴でもある石の外壁に“角川武蔵野ミュージアム”の図書・美術・博物を三角形で表現したロゴがありました。



▲2階ロビー

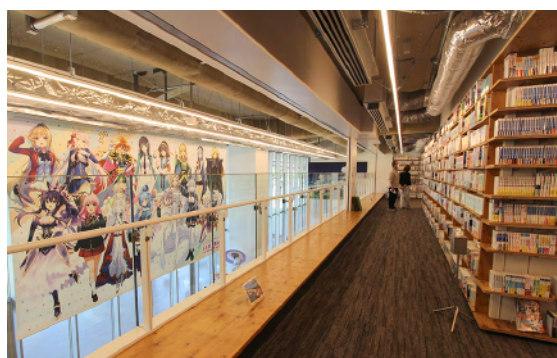


▲図書・美術・博物を三角形で表現したロゴ

1階に降りると、4階のエディットタウンとは異なるテイストのマンガ・ラノベ図書館があり、KADOKAWAが発信する「マンガ・ラノベ」の世界観が堪能できる、広々とした明るい空間が広がっています。皆さん、明るく開放的な空間でマンガ・ラノベと共に思い思いの時を過ごされていました。ここには、KADOKAWAグループのほぼすべてのライトノベルをはじめ、協賛各社から寄贈されたライトノベルも含めて約3.7万冊が配架され、日本で一番ラノベが読める図書館となっています。マンガ・ラノベ図書館の中からは、源義庭園が一望でき、天気の良い日は外へ出ることも可能、また、KADOKAWAが展開する児童書も配架されていました。



▲「マンガ・ラノベ」の世界観が堪能できる図書館



今回、取材のインタビューに答えて頂いた、角川武蔵野ミュージアム展示グループの滝口様と渡部様。館内の見学・撮影では渉外・広報部の斎藤様に案内していただきました。館内見学前にインタビューをさせていただき、それぞれの空間に込められたテーマや特徴について、印象的なお客様のお話などについてお話いただきました。

中でも、エディットタウンの本をじっと見られていたご年配のご夫婦から「長年の友人に会ったみたいだった。」というお声があるのをお聞きしたことも。本の並びや配置、面構えが変わる事で感じる事が人それぞれで感じ方が異なるというお声も聞くことができました。図書館として本を座って読んで堪能する方が全てではなく、空間そのものを楽しむ方、本棚の前に行って本を見るだけの方、座ってじっくりと読みふける方など、すべての方を迎えてくれるコンセプトがあって、

お客様それぞれが過ごしたい目的と合致していると、お話を聞きながら感じました。また、今後の展望としましては、エディットタウンや本棚劇場、マンガ・ラノベ図書館など色々なエリア・空間を提供する中で、常に新しい本に出会っていただけるように更新をし続けていきたいとの事。マンガ・ラノベ図書館については子供でも気軽に入れるよう、小学生は 200 円という料金設定にしており、放課後に通ってくれるような、ご近所の皆さんに愛されるような、ここに来たら新しい本や何かしらの発見がある！というような場所にしていきたいとお声や思いを聞くことができました。一年を通して数多くの企画があり、ワークショップも多数開催されているとのことでした。こちらでは「まぜまぜ」ともいわれているように、図書館、美術館、博物館が融合した複合施設となっており、今回は急ぎ足での取材になりましたが、本当に見どころも多く、写真では感じ取れないリアルな空気を、いい意味での“ごちゃごちゃ感”を、実際に訪問して感じていただきたいと思います。



▲展示グループの渡部様